

新学習指導要領では「新しい時代に必要とされる資質・能力の育成」が求められており、中央教育審議会答申においては、「主体的・対話的で深い学び」がその資質・能力を養う学習活動として提唱されている。著者はこの主体的・対話的で深い学びを「文脈性のある学び」と捉え、「自ら問い、調べ、考え、判断し、表現する」という学びの経験である問題解決学習という枠組みで考察を展開している。そして問題解決学習の利点として、知識・技能が活用可能な形態で習得されること、子どもたちの仲間関係が互恵的なものに高め合えること、知識・技能と学び方を統一的に指導できること、生活指導も達成できること、などを挙げている。

この問題解決学習の捉え方について、次の3点から考察する。第1に文脈性のある学び、第2に教師の役割、第3に抽出児の設定についてである。

第1の文脈性のある学びについてである。ヴィゴツキーは小学生段階の子どもの思考の特性として、非随意性、非自覚性を挙げている。それが学んだことを随意的に生かすことができない原因の一つとなる。そこで著者は文脈性のある学びが重要であると述べている。文脈性のある学びを行うことで、知識・技能と活用の仕方が統一的に学ばれることについては同感である。しかし、文脈的知識・技能はその文脈の中でのみ通用する知識・技能である。他の場面における転用が重要であり、そのためには一般化による汎用可能な知識・技能への作り替えが必要であり、作り替えの技能の習得も必要であろう。

第2の教師の役割についてである。著者は「一人の学び手としての教師」を提唱し、教える、教えられる固定的な関係性を超越した学びの場面の構築の重要性を述べている。一方で、「教えるべき知識・技能」を単元の学習活動の中に計画的に配置する、「切実な問題」に遭遇させる、「学ばせる」といった教える側からの一方的な指導方法の提唱である。著者自身が否定されたものとして紹介している「実証主義的な知識観」から脱却できていないのではないか。

第3の抽出児の設定についてである。著者は抽出児を設定する意味として、「子どものため」という思想の具体化、一人の子どもを見ることで、その子とのつながりの中で別の子どもが具体的・個性的な存在として見えてくると述べている。しかし、著者は構成主義の考え方を援用し「知識・技能は、人間集団に「文化」として蓄積されている」と紹介している。この考え方と抽出児の設定、「一人学習の時間」、例として示される教師から子へのアドバイスの仕方に整合性が感じられない。知識・技能が間主観的なものである以上、はじめから間主観的にコミュニケーションを主体とした学び方が求められるのであり、教師のアドバイスも、個ではなく集団に対して行うべきであろう。

以上、文脈性のある学び、教師の役割、抽出児の設定に焦点を当て、問題解決学習について考察を加えた。著者は構成主義の学び方を紹介してはいるものの、学びの根底は従来の実証主義的な知識観から脱却できていないことが明らかにできた。学習指導要領で学習内容が規定されている教科学習の現実の中で、構成主義の考え方にもとづく問題解決学習は可能なのであろうか。可能にするための必要とされる前提について考えていく必要があるだろう。